

『狐物語』における色彩

—— データと考察 ——

高 名 康 文*

はじめに

今回の報告にあたっては、『狐物語』26 枝篇 29746 行に目を通し、色彩を表す語についてのデータを作成しました。これをもとに今日はお話しをしたいと思えます¹。

私の専門は中世フランス文学で、普段は『狐物語』におけるパロディーを専門に研究をしています。今回の研究報告を依頼された際には、西洋中世に関する研究をしている若手の交流会と聞いて気楽に引き受けたのですが、歴史や美術史をご専門とする方々が大半という聴衆を前にして、いつものように文学テクストの話ばかりをしていいものだろうか、といささか悩みました。自分が出来る範囲でなるべく広く興味を持ってもらえそうな話題は何か、と考えた次第です。たまたまここ数年、12, 13 世紀の文学作品の中で、登場人物が人の死を悲しむ場面における描写や台詞に見られる定型的な表現（ラテン語 *planctus*）が、『狐物語』においてもじられて使われていることに注目して、

* 福岡大学人文学部准教授

¹ 本稿は、2009 年 10 月 10 日に京都女子大学で開催された西洋中世学会「若手交流セミナー」におけるシンポジウム「若手研究者の模索する中世像」で行った発表『『狐物語』における色彩』の発表原稿に、会場や懇親会の場で受けた助言や指摘を参考にして手を加えたものである。発表時の雰囲気を残すため、語調は「です、ます」調のままとした。

データをとりながら研究をしていたということがありました。また、少し前に服飾史の徳井淑子先生のご著書²を、『狐物語』のいくつかのエピソードに結びつけながら興味深く読んだことがあるということもありました。さらには、中世の色彩論については、M. パストゥローの著作が松村剛、松村恵理の両先生、篠田勝英先生によって相次いで翻訳されており、私も遅ればせながら目を通そうとしているところでした³。以上のような状況が、色彩語におけるデータを作成することを思いついた背景です。色彩論には門外漢ですので、いささか心もとないのですが、少なくともデータには何がしかの関心を持って頂けるのではないかと期待しております。

本発表では、データ作成の際にとった方法を説明した上で、データを利用しながら、私の『狐物語』における色彩の読み方を示したいと思います。

データの作成について

第一に調査方法について報告します。まず、底本とそれを選択した事情について、この作品の校訂の歴史に触れながら述べたいと思います。近代的な方法による『狐物語』の初めての本格的な校訂本は、1882年から1887年にわたって刊行されたE. マルタンによるものです⁴。マルタンは、当時発見されていた全ての写本に目を通した上で α 、 β 、 γ の三群に分類しました。系統についてごく大雑把に申し上げると、オリジナルから α 系、 β 系の読みに分岐し、これら二つを参考しながら編纂されたのが γ 系ということになっています。マル

² 徳井淑子『服飾の中世』勁草書房、1995；『色で読む中世ヨーロッパ』講談社、2006。また、この発表の数日前に、私が勤務校で学生向けに書いた『色で読む中世ヨーロッパ』に関する紹介文を（筆者が推測するに）Web上で見つけた徳井先生が、新刊のシシル著、伊藤亜紀・徳井淑子訳・解説『色彩の紋章』、悠書館、2009をご恵送下さるという偶然があった。

³ 松村剛・松村恵理訳『青の歴史』、筑摩書房、2005；松村剛・松村恵理訳『縞模様の歴史—悪魔の布』、白水社、2004；松村剛監修、松村恵理訳『紋章の歴史—ヨーロッパの色とかたち』、創元社、1997；篠田勝英訳『ヨーロッパ中世象徴史』、白水社、2008など（著者は全てM. パストゥロー）

⁴ éd. E. Martin, *Le Roman de Renart*, 3 vols., Strasbourg : Trübner, 1882-1887.

タンは、 α 群のうちで A 写本と名付けたフランス国立図書館 fonds fr. 20043 写本を主たる底本としました。その上で、A 写本に収められていない枝篇（この用語については後に説明します）については、 α 群の他の写本にある場合はそこから、ない場合は β 群、 γ 群、あるいはそれらに分類されない写本からというようにして、全ての作品を収めています。その後、1948年から1972年にわたっては、M. ロックが β 群の B 写本（フランス国立図書館 fonds fr. 371 写本）を底本とした校訂本を出版しました⁵。この仕事はロックの死によって中断していましたが、唯一残されていた枝篇 *Renart empereur* 「皇帝になったルナル」の校訂が1999年に F. ルコワによって刊行されています⁶。次に、これは我々日本の研究者が大いに誇りとするところですが、1983年と1985年には、福本直之先生、原野昇先生、鈴木覺先生の手によって、 γ 系の C 写本（フランス国立図書館 fonds fr. 1579 写本）と M 写本（トリノ王立図書館 varia 151 写本）を底本とした校訂本が出版されました⁷。先生方のお仕事は、フランス文芸アカデミーよりラグランジュ賞を受賞し、現在に至るまで国際的に高い評価を受けています。また、1998年には α 、 β 、 γ のいずれにも分類が難しいとされている H 写本（パリ、アルスナル図書館 3334 写本）を底本とした現代フランス語訳つきの校訂本が、A. ストリュベルを中心に編まれてブレイヤード叢書に入っています⁸。

私が今回使用したのは、これらのうちでは最も古いマルタン版です。文学研究である作品についてのデータを作る際には最も優れた校訂本を底本としなくてはならないということは言うまでもありませんが、今日目から見れば、様々

⁵ éd. M. Roques, *Le Roman de Renart*, 6 vols., Paris : Champion, 1948-1963.

⁶ éd. Félix Lecoy, *Le Roman de Renart. Branche XX et dernière. Renart Empereur*, Paris : Champion, 1999.

⁷ éd. N. Fukumoto, N. Harano et S. Suzuki, *Le Roman de Renart, édité d'après les manuscrits C et M*, 2 vols., Tokyo : France Tosho, 1983, 1985.

⁸ éd. R. Bellon, D. Boutet, S. Lefèvre, et A. Strubel, *Le Roman de Renart*, Paris : Gallimard, coll. Pléiade, 1998.

な意味で古いマルタン版をそれでも使う理由は、これが全ての枝篇を納めている唯一の校訂本であるということです。

この点につきましては、『狐物語』という作品の特徴に触れなくてはなりません。この作品の原題 *Roman de Renart* の roman は、中世フランス語においては、ラテン語に対する俗語のフランス語で書かれた作品のことを指し示しました。『狐物語』は、現代フランス語でこの語が表す「小説」のように首尾一貫した筋を持った作品ではありません。狐ルナールと狼イザングランの紛争を中心とした動物を主人公とする世界を共通の題材として、複数の作者が書いた「枝篇 (branche)」と呼ばれる作品の寄せ集めなのです。このような作品の性質を反映して、各写本に収められている枝篇の数と順序は、 α 、 β 、 γ という三系統それぞれの中ですら一定ではありません。このような作品を校訂するに際して、マルタンは様々な写本から枝篇を拾い集めてきて『狐物語』の全体像を示そうとしました。一方、マルタン版以降の校訂本では、それぞれが底本とする写本のあり様をそのままに示すことを基本方針として、収められている枝篇をその順番通りに校訂しています。すなわち、全枝篇を収めているのはマルタン版だけなのです。

以上のような事情が今回の選択を正当化してくれるかと思います。J. シュブルナとM. ド・コンバリュール・デュ・グレの仕事に『狐物語』のモチーフと登場人物の詳細なインデックスがありますが、この仕事もマルタン版を底本としています⁹。なお、このインデックスでもそうですが、マルタン版が第XXVII枝篇として収めているフランコ＝イタリアン方言で書かれている作品については、私のデータのコーパスからは外してあります。

次に、語を取捨選択する際にとった方針について説明をします。まず、固有名詞はコーパスから外しました。『狐物語』に出てくる登場人物は、熊の Brun

⁹ M. de Combarieu du Grès & J. Subrenat, *Le roman de Renart. Index des thèmes et des personnages*, Aix-en-Provence : CUERMA, 1987.

ブラン（茶色）や猪の Baucent ボーサン（雑多な色の帯を持つということ）のように、その毛皮の色を名前に冠している例が多いのですが、上に挙げたインデックスの他、各エディションに固有名詞のインデックスがある、というのがその理由です。

色彩に関する語を採取するにあたっては、A. オットの『古フランス語における色についての研究』¹⁰に目を通して、古フランス語で色彩を表す単語を頭に入れました。1899年に出版された研究ですが、ラテン語に遡りつつ、それを語源とした語のフランス語における受容と変遷を紹介する傍ら、フランク語などラテン語以外の語起源の語についても同様に紹介するという方針を一貫させており、巻末のインデックスも充実しています。M. パストゥローらによる最新の中世の色彩論でもよく引用されています。

また、今回は、色彩そのものを意味している形容詞、名詞、動詞のみを集めました。「そのもの」というのは、例えば「白」に関して言えば、形容詞 blanc「白い」と、それから派生する動詞 blanchir「白くなる」や名詞 blanchor「白」は集めるけれども、「白い」という属性を持つ flor de lis「百合の花」や aube espine「さんざし」や noif「雪」は集めないということです。これらには、A. オットの研究で紹介されているように、例えば「雪よりも白い」というような慣用的な言い回しがあるぐらいで、明らかに白を想起するのですが、これらを採用すると、白がこの色を想起するとは限らないものとの境界をどこで引けば良いのかという問題が出てくるので、対象から外しています。以上のような基準をとっているために、出来上がったデータが提供してくれる色彩に関する情報は、テキストが現実を含むものからかなり目減りしたものになっています。しかし、あくまでも研究の目安にというのが文学研究におけるデータベースの位置づけだと言えるでしょう。

¹⁰ A. Ott, *Etude sur les couleurs en vieux français*, Paris : Emile Bouillon, 1899 (Reprint : Genève, Slatkine Reprints, 1977).

語の取捨選択について付け加えますと、境界的であると考えられるけれども、データに取り入れているものとして、毛皮を意味する語で色と共に素材や模様を表す Vair（シベリアリス模様）と Gris（ロシアリスの毛皮）があります。これらは、色彩と結びついて中世の象徴体系の中に位置づけられていますので、取り上げるのが適当であると判断した次第です。

『狐物語』における色彩

以下に、『狐物語』における色彩について、私の現時点での読み方を巻末のデータを利用しながら示したいと思います。なお、その際に『狐物語』の各枝篇の名称は、マルタンが付した番号で呼ぶことにします。

調査の結果、マルタン版の第 I 枝篇から第 XXVI 枝篇の合計 29746 行（各行は 8 音節からなります）の中に 180 の色彩に関する語を見つけることが出来ました¹¹。表 A には各色彩語の出現回数を示しています。ここでは、白、黄、赤、緑、青、黒という中世の基本六色を太字にして、赤や黄のバリエーションとしてとらえられた赤褐色や黄褐色はその間に、その他灰色や、雑多な色として認識されているものは右側の列に記しています。

まず、色彩語の種類があまり多くないことが目につくかと思います。八音綴で 3 万行弱というコーパスの中で、22 種類です。これが、中世フランス語に色彩を表す語が貧弱であったということに由来しているわけではないことは、A. オットの研究に収められている語彙の豊富さを見れば明らかです。また、色彩そのものというよりは登場人物の心情を表す Pale（「青ざめた」、現代フランス語 *pâle*）などの語、また、「白髪」という意味での用法に限定されて白に近いニュアンスで使われている Chenu 以外には例の少ない灰色、

¹¹ 講演時に配布した資料では 165 例であったが、中世フランス文学の電子コーパス *Corpus de la littérature médiévale, langue d'oïl des origines à la fin du XVe siècle*, Paris : Champion électronique, 2001（データが不正確であるということで大変に評判の悪いものであるが）の検索機能を利用したところ、見落としが 15 箇所見つけた。

赤と黄のバリエーションである赤・黄褐色を除けば、全てが紋章で使用される六色に収まっています。この物語では、現実を描写するために細かい色のニュアンスを表現することよりは、当時の象徴体系を利用して、描く対象の価値づけを行っているのではないかということが予想されます。

表 A. 色彩語の登場回数

白	Blanc (28)	青ざめた	Pale ¹² (10), Teint (6)
黄	Jaune (6), Or (1), Bloi (1)	灰色	Gris (1)
赤・黄褐色	Ros (46), Fauve (2)	灰色	Bis (1)
赤	Roge (9), Vermeil (12)	灰色（白髪）	Chenu (12)
緑	Vert (5)	灰色（馬）	Ferrant (1)
青	Blo (0), Pers (1)	灰色（馬）	Liart (1)
黒	Noir (30)	雑多な色の帯	Baucenc (2)
		ヴェア	Vair (3)
		りすの毛皮	Gris (2)

総計 180 語

基本六色のうち例の少ないものから述べていくことにします。まず、青です

¹² 13 世紀のバルトロマエウス＝アングリクスの『事物の属性について』19 章 7-8 節で赤、黄、赤紫、緑と共に白と黒の間の中間の五色のうちの一つとして論じられている色 *glaucus* は、そのフランス語訳において *pâle* と訳された。シシルは『色彩の紋章』第二部（16 世紀前半）で、この部分をそのまま引き写した上で、この色を黄色に近いニュアンスの色ととらえて論じている（徳井淑子「解説 II—博物誌の伝統と近代的な感性」、前掲『色彩の紋章』、p. 152-155 及びに M. Salvat, « Le traité des couleurs de Barthelmi d'Anglais (XIIIe s.) » in *Les couleurs au Moyen Age*, Aix-en-Provence : CUERMA, 1988, p. 359-385 を参照）。この書の伊藤・徳井訳では、この文脈に鑑みて *Pâle* に「萌黄色」の訳があてられているが、『狐物語』での用例では全て、色彩としてよりは登場人物の苦しみや悲しみの心情を表す語として用いられているので、「青ざめた」と訳し、紋章で使われる主要六色以外の色に分類する。

が、12, 13 世紀が、マリア信仰の流行の中、青がマリアの色となり、さらには王家の紋章の色となった「青の昇格」の時代でありながらも、この色が文学テキストの中でよく言及されるようになるのは14世紀になってからであることは、M. パストゥローが指摘するところだ¹³。この色に青そのものというよりは顔色を表す *pers* の1例しか拾えないということは、『狐物語』の作者たちにとっても青が、パストゥローの言う通り、何ものも意味しなかったということでしょう。また、宮廷風の抒情詩であれば、恋の季節を表すトポスとして用いられる新緑の緑も5例しかありません。『狐物語』の多くの枝篇は、たとえば春夏の良い季節を舞台としていても、飢えた家族の食糧を探すためにルナールが冒険に出る、というところから始まるので、春の華やいだ雰囲気は強調されることはほとんどなく、緑への言及が少ないのは、このような作品の性質が影響してのことと考えられます。黄色も少ないのですが、この色が一部の枝篇の中で大きな役割を果たしていることについては後で触れたいと思います。

今述べた以外の白と黒と赤は、あらゆる文明で基本色となっているわけですから、ある程度の例が拾えたことは当然と言えば当然です¹⁴。しかし、内訳を見てみると、白は本当に様々なものを指しているものの、黒、赤に関しては出現箇所や用法が限定されているということが指摘できるかと思います。黒は、全28例中の12例が、第XIII枝篇（1205～1250年頃¹⁵）でルナールがこの色に変身した際の毛皮の色を指すのに加えて¹⁶、4例が第VII枝篇（1195～1200

¹³ M. Pastoureau, « La promotion de la couleur bleue au XIIIe siècle : le témoignage de l'héraldique et de l'emblématique », in *Il colore nel Medioevo : arte, simbolo, tecnica : atti delle giornate di studi, Lucca, 5-6 maggio 1995*, Lucca : Istituto storico lucchese, 1996, p. 7-16 (p. 10sq.).

¹⁴ B. Berlin & P. Kay, *Basic color terms*, Berkeley & Los Angeles, 1969.

¹⁵ 推定測定年代は、L. Foulet, *Le Roman de Renard*, Paris : Champion, 1914, p. 100-119 による（以下同様）。

¹⁶ 第XIII枝篇第1020, 1022, 1149, 1163, 1328, 1329, 1433, 1598, 1665, 1710, 2320, 2364行。その他、同枝篇777行では小人、第XXIII枝篇1359行と1984行では魔術に使われる猫、魔術が生み出した動物（悪魔）というように悪魔性の強いものの頭髪や毛皮にこの色が与えられている。

年頃）でクリュニー会修道士の衣服の色を指して *moine noir* 「黒坊主」と言うのに使われています¹⁷。さらには、その他の 12 例のうち、5 例は登場人物の顔色が怒りや悲しみで暗くなるというものです¹⁸。赤もまた、登場人物が血まみれになるというイメージで使われるものが大半を占めています。一般的な赤 *Roge*（現代フランス語 *rouge*）が占める用例 9 例のうち 5 例¹⁹、真紅を表す *Vermeil* の 12 例のうち 9 例がそれにあたります²⁰。すなわち、白以外の色はいくつかの限られた概念に結びついて繰り返し使われているということが言えるかと思えます。

黄がかった赤色である赤褐色 *Ros*（現代フランス語 *roux*）は、この意味で注目に値します。この色は数量的に飛びぬけて多く、『狐物語』における色彩語全体の 4 分の 1 強を占めています。周知のように、この物語は主人公である狐のルナルルによる、狼のイザングランを始めとした動物や、動物たちの世界の外にいる人間に対する数々の悪事を描くことで成り立っていますが、赤褐色はルナルルの毛皮の色であり、まさしくこの作品の色彩の基調をなしています。

『狐物語』の中で一番始めに書かれた枝篇とされている第 II-Va 枝篇（1174～1177 年頃²¹）の冒頭には、鶏のシャントクレールが赤褐色の毛皮の化け物に襲われる夢を見て、妻のバントに夢判断をお願いするというエピソードがあります。妻に、それは狐に襲われるということだという忠告をもらったも

¹⁷ 第 VII 枝篇第 161, 165, 359, 377 行。ここでは、悪魔憑きという設定のルナルルの口から、黒色の修道衣をまとうクリュニー会修道士について、連中は修道士というよりは悪魔だということが語られる。

¹⁸ 第 I 枝篇第 1007 行、第 XI 枝篇第 6, 1444, 2515 行、第 XIII 枝篇第 1597 行。

¹⁹ 第 I 枝篇第 699 行、第 IX 枝篇第 1170 行、第 XVI 枝篇第 1298, 1301, 行、第 XXIII 枝篇第 1697 行。

²⁰ 第 I 枝篇第 1208 行、第 VI 枝篇第 295 行、第 IX 枝篇第 698, 1370 行、第 XI 枝篇第 1632, 1639 行、第 XVII 枝篇第 730, 1320, 第 XXII 枝篇第 680 行。

²¹ マルタン版で言うところの第 II 枝篇と第 Va 枝篇は、 γ 系写本以外では切り離されて配置されているが、フーレは前掲の研究で、これらがもともとは一貫した作品であったという説をたてて、それを第 II-Va 枝篇と呼んでいる（L. Foulet, *op. cit.*, p. 190-217）。

の、シャントクレールはそれを無視したのためにルナールに襲われてしまいます。この後、赤褐色はルナールとは切っても切り離せない色になりました。中でも、データの中に散見される Renart le ros 「赤毛のルナール」という言い回しは、登場人物や物語の語り手が、主人公の悪事を語る際に繰り返し使われることになりました。このことの背景には、古来より悪徳や禍々しい人物と結び付けられていたこの色彩が、ルナールに似つかわしいものであったということがまずあります²²。さらに言えば、一行八音節で二行ずつ脚韻を踏んでいくというこの作品の性質上、Renart le ros がちょうど半区を構成する四音節であるという意味で良いリズムグループを構成しているということも影響したと考えられます²³。前の行が-os で終わる際には韻を整えるという作用もあったことでしょう。今回の調査では、この言い回しが全コーパス中に 20 見つかり、うち 7 例が行末に置かれて前か後ろの詩行と韻を踏んでいることが分かりました。

これと同様の言い回しとして、Renart le goupil 「狐のルナール」という、登場人物名と、その動物としての種を同格として並べるものもあります。こちらの言い回しは、物語世界の王さまであるライオンについて Noble le lion 「ライオンのノーブル」、あるいは、ルナールの好敵手である猫について Tibert le chat 「猫のティベール」、もしくは第 II-Va 枝篇でルナールが姦通事件と強姦事件を犯した狼イザングランの女房エルサンについて Hersent la louve 「雌狼のエルサン」というような同種の言い回しを生むことになりました。一方、登場人物名と毛皮の色を同格として並べている Renart le ros に関しては、例えば Tibert le gris 「灰色のティベール」のような言い回しを生む

²² Voir R. Mellinkoff, "Judas's red hair and the jews", *Journal of Jewish Art*, 9 (1982), p. 31-46 ; E. Suomela-Härmä, « Des roux et des couleurs », in *Les couleurs au Moyen Age*, Senefiance 24, 1988, Aix-en-Provence : CUERMA, 1988, p. 403-421 (p. 412).

²³ R. Bellon, « Renart li rous : remarque sur un point de l'onomastique renardienne », in *Les couleurs au Moyen Age*, *op. cit.*, p. 17-28.

には至りませんでした。赤褐色とルナールとの結びつきは『狐物語』の色彩体系の中で特権的な位置を占めているということが出来ます。私としては、今回のデータを見て、マルタン版においては第 IX 枝篇、XII 枝篇、XIV 枝篇、XVII 枝篇といった 1000 行を超える枝篇で一回もこの語が使われていないことを知って、このようなことがあるのか、と驚いている次第です。

「赤毛」と聞いて現代人がまず思い浮かべるのは、ユダでしょう。しかし、R. メリンコフが指摘するところでは、ユダが赤毛で描かれている美術作品は、現存するものでは、『狐物語』が書かれた時代よりも下の 13 世紀中葉以降のものに限られるということです²⁴。実際のところ、『狐物語』ではここまで述べてきたように「赤毛」という言葉がルナールの悪徳と結び付けられて繰り返し出てきますが、ユダへの言及があるのはたったの一例です。これは、第 Va 枝篇の裁判の場面で、狐が四十雀に平和の接吻をしようという偽りの提案をしたことが熊のプランによって述べられる、というものです。

Et puis refist il bien que lere
De la mesenge sa conmere,
Quant il au baissier l'asailli
Conme Judas qui deu traï. (Va 759-762²⁵)

（それから、彼は代母である四十雀にも悪さをしでかした。神を裏切ったユダよろしく接吻に見せかけて彼女に襲いかかったのだ。）

偽りの接吻というところでユダとルナールが比較されていますが、赤毛への言及はありません。繰り返シルナールの赤毛が登場人物や物語の語り手の罵倒の

²⁴ R. Mellinkoff, op. cit., p. 35sq.

²⁵ 以下、『狐物語』からの引用は、éd. E. Martin, *Le Roman de Renart*, op. cit. より、枝篇番号と行番号を示して行うものとする。なお、引用 4 行目のキリスト教の「神」を意味する deu の d は現代の校訂本では大文字で表記される。

対象になる作品の中で、ユダへの言及がこれだけだという事実は、少なくともこの時代のフランス語圏の人々にユダ=赤毛という観念連合が確立していなかったということを、文学のテキストが証明しているところであると言えるのではないのでしょうか？²⁶

次に、表 B には採取した色彩語が何を修飾しているのかについて示していますが、実に 5 割以上の 94 例が登場人物の毛色を示したり、頭髪の色、髭の色を示したりしていることが分かります。さらに、表 C に記しましたように、そのうちの 3 分の 2 以上の 62 例が、ルナールに関するものです。ルナール以外で毛色が言及されている動物は、ルナールに襲われる鶏であったり、ルナールを追跡する猟犬であったりと、物語の中のわき役に過ぎません。固有名詞についても色を示す名前が多いような印象を持っていましたが、調べてみると、いくつもの枝篇に登場する主要な登場人物の中では、熊の Brun ブラン（「茶色」という意味）と猪の Baucent ボーサン（「様々な色の帯を持つ」という意味）、その他にはルナールの息子の Rovel ロヴェル（「赤みがかった」という意味）がいる位です。先に、Tibert le gris「灰色のティベール」というような表現はないと述べましたが、これは、今回の調査で第 XII 枝篇（1190 年頃）の第 206 行で猫のティベールの毛色を灰色 gris としているところがあることを確認したからで、実のところ私はこれまで気にとめたことがありませんでした。『狐物語』に内在する色彩の体系では、常にルナールの毛皮にスポットライトが当たるようになっていくということが出来ます。

²⁶ この問いかけに対しては、会場からユダについての直接の言及ではなくても、ユダを思わせる人物についての言及はないかという質問が寄せられた。赤褐色 Ros でルナール以外の人物が言及されている例としては、第 VII 枝篇でルナールが自分を他の悪人と比べながら罪を告解する場面で赤毛の人物を三人挙げている例（第 689, 691, 701 行）と、第 XIII 枝篇（1205～1250 年頃）で栗鼠のルーセルの毛皮への言及（第 1355 行）がある。三人の悪漢のうち一人は赤毛と形容されているのみで、残りの二人は「泥棒」、「赤い穴を覗いて回る」と触れられているが、いずれの人物も特にユダを想起するようには思われぬ。また、ルーセルはこの毛色にも関わらず好意的に描かれている。

表 B. 色彩語が指しているもの	表 C. ルナールの毛色を指す色彩語
毛色・頭髪・髭 94 語 (52.2%)	Ros 41/46
表情・心情 23 語 (12.8%)	Chenu 5/12
衣服 15 語 (8.3%)	Blanc 3/28
武具・馬具 8 語 (4.4%)	Jaune 1/6
衣服／血* 8 語 (4.4%)	Noir 12/30
血 6 語 (3.3%)	合計 62 語/180 語
その他 26 語 (14.4%)	
合計 180 語 (100%)	
※「衣服／血」は血まみれの顔を法皇の赤い頭巾などに例えて被害者をからかっている例であることを指す	※各色彩語がルナールの毛色を指している回数/各色彩語の総出現回数

先に、ルナールの毛色が示されている例が 62 例あると述べましたが、表 C に示しましたように、赤褐色の Ros が占めるのは、そのうち 41 例です。残り 21 例では他の色が述べられているということですが、その内訳は、白 Blanc が 3 例、黄 Jaune が 1 例、黒 Noir が 12 例、及びに白髪を示す Chenu が 5 例です。付け加えると、黄と黒にはルナールの武具・馬具の例が黄色に 1 例、黒に 2 例あります。すなわち、白 Blanc 以外については見落とせない割合の例がルナールの毛色やその人物を象徴する持ち物を表すために使われている、ということが言えるかと思えます。言い換えれば、本来赤褐色のルナールが様々な色に変化することでもととは乏しい『狐物語』における色彩語が増殖しているという見方が可能であるということですが、以下には、このような見通しで『狐物語』における色彩を論じてみたいと思います。

ルナールの変身

赤褐色の次には、「白」を表す Blanc と「白髪」を表す Chenu に注目することになります。狐の毛は喉元からお腹にかけて白くなっていますが、『狐物語』の作者たちはこのことにも注意を払っています。先ほど触れました第 II-Va 枝篇で、鶏のシャントクレールの悪夢に現れた赤褐色の毛皮の怪物の腹は白かったということが述べられています。

Mes de ce s'est plus merveilliez

Que blans estoit desos le ventre (II 152-153)

([シャントクレールは]怪物の腹の下が白いことに驚きました)

また、第 III 枝篇（1178 年頃）においては、道で死んだふりをしたルナールを商人が荷台に積んだところ、荷台にあった鰻を失敬されてしまう、というエピソードがあります。次の引用は、ルナールが死んでいると思いついでいる商人の台詞です。

Vez con la gorge est blanche et nete ! » (III 72)

(あの顎がどんなに白くてきれいか見てみな！)

これに先立っては、毛皮を売れば 4 スーにはなるだろうという台詞があります。冬になって、喉元が白くなった狐の毛皮は高く売れるだろう、と捕らぬ狸の皮算用をしている、というわけです。これらの最初期の枝篇では、狐の毛のこの部位の白さはこの色一般を表す Blanc で表現されていますが、初期枝篇の中では最も後の方で書かれたとされている第 I 枝篇（1179 年頃）では、ルナール自身の台詞の中では「白髪」を表す Chenu という語が使われています。

G'ai tote chenu la gorge.

Vels sui, si ne me puis aidier, (I 1266-1267)

（私の喉元はすっかり白くなってしまいました。もう年なのです。ですから、ものの役にはたちません。）

これは、エルサンとの姦通を巡る裁判の中で弁明をしている場面なのですが、「ものの役にはたたない」と訳した代名動詞 *s'aidier* で問題になっているのは、性的な能力のことであると解釈されています²⁷。すなわち、喉元の毛が白いことを、年をとって白髪が出ていることに置き換えて、自分は年をとって性的な能力がないので、エルサンと姦通を犯すことはありえないと述べているというわけです。

このように言葉を手品のように扱うことで錯覚を呼ぶという詐術は、まさにルナルの得意とするところですが、この角度から赤色について論じることになります。同じ第I枝篇の前半では、この裁判にルナルを呼び出すために王からの使者としてやって来た熊のブランを、言葉巧みに誘い罠にはめるというエピソードがあります。この罠とは、森番が樫の木を割ろうと楔を二本打ちこんでいるその割れ目をブランに見せて、「ここに蜂蜜があるからすすりたまえ」と言って騙すというものです。脚と顔を突っ込んだところで楔を抜かれたブランは、もがき苦しみます。そこに森番が帰って来たものですから、ブランは無理やり顔を引き抜きますが、顔の皮と脚の皮がむけて血まみれになってしまいます。このエピソードの落ちでルナルがブランをからかう場面でも、やはりルナルによる現実の読み換えが喜劇的な効果を持って現れています。

²⁷ G. Tilander, *Remarques sur le Roman de Renart*, Göteborg : Elanders Bokryckeri Aktiebolag, 1923, p. 95-96 ; id., *Lexique du Roman de Renart*, Göteborg : Elanders Bokryckeri Aktiebolag, 1924, p. 8.

De quel ordre voles vos estre

Que roge caperon portes ? » (I 698-699)

(赤い頭巾を被っているけど、どこの修道院に入るおつもりかね?)

引用文中の *ordre* は、修道院を指す言葉ですが、中世において修道士はいかなる儀式においても赤い衣服を身にまとうことはありませんでした。赤は、教皇や司教といった高位聖職者だけが身にまとう色です。すなわち、ルナールは、血まみれのブランを修道士候補に見立ててからかっているわけですが、修道士ならば白や黒の服を身にまとうはずなのに、どうして赤い頭巾を被っているのか? もしかして、教皇にでもなるつもりなのかい、と嫌がらせを言っているというわけです。この色彩に関する冗談はよほどにうけが良かったらしく、物語の中で同工異曲の形で数回出てきます。すなわち、中期に属するとされている第 VI 枝篇 (1190 年頃) の第 295 行の裁判の場面で、ノーブル王の口から語られている他、第 IX 枝篇 (1200 年頃) の第 698 行と 1170 行、第 XVI 枝篇 (1202 年頃) の第 1298 行、また後期の作品とされる第 XXIII 枝篇 (1205~1250 年頃) の第 1697 行でも同様の表現が繰り返されています。データの中で「衣服/血」と分類しているものがそれらにあたります²⁸。

以上のことを言い換えると、赤褐色のルナールが、自分の毛の白い部分を言い逃れのために利用したり、言葉巧みに他の動物の毛を引きむしり、赤く染めるというイメージで『狐物語』における色彩を豊かにしていくということになるでしょう。

これらとは別に、実際にルナールが赤褐色以外の毛色に変身するという例もあります。一例ずつですが、第 Ib 枝篇「旅芸人になったルナール」(1179 年頃) と第 XIII 枝篇「墨染めのルナール」(1205~1250 年頃) がそれで、それ

²⁸ そのうち、第 IX 枝篇第 1170 行に関しては、村人リエタールの妻が犬にルナールを襲わせて血まみれにしてやる、と言っているもので、ここに挙げたものとは性質を異にしている。

ぞれ黄色と黒に変身をしています。前者は初期枝篇の最後に成立したとされ、後者は後期の作品に属するとされています。E. スオメラ＝ハルマが言及し、また M. パストゥローが「染物屋のイエス」で論じている問題ですので²⁹、これらについては、かいつまんで説明することにしたいと思います。

第 Ib 枝篇における変身とは、ノーブル王の宮廷で縛り首になりそうになったところを逃げてきたという設定のルナルが、染物師の家に侵入し、染物桶に落ちて黄色く染まるというものです。染物屋に見とがめられたルナルは、自分も染物屋で新しい技術を教えてあげるからと言って助けを求めますが、引き上げてもらうや否や、さっさと逃げ出してしまいます。道で宿敵のイザングランと出会いますが、狼は黄色く染まっている狐がルナルであることに気がつきません。ルナルは、自分はイギリスから来たガロパンという旅芸人であると偽り、色々な物語の演目を持っているが、残念なことに伴奏のための楽器ヴィエルを盗まれてしまった、と話します。Votre merci. (ありがとう) の votre を foutre (「性交する」の卑語) と発音するルナルの「外人のマネ」に騙されたイザングランは、すっかり気を許してしまい、百姓の家に楽器があるのを知っているのでそれを盗みに行こうと誘います。イザングランは親切にも、怖がるルナルを置いて一人窓から侵入をしますが、ルナルは窓を閉める突っかい棒をはずしてしまいます。窓が閉まる音に驚いて起きた百姓は家中の者を起こしますが、狼に尻を噛まれます。そのイザングランの尻に飼い犬が噛み付き、狼は睾丸を噛み切られてしまいます。

先行研究が指摘するように、黄色は中世以来価値を貶められてきた色で、嘘と裏切りと規範の侵犯を表す色でした。この色の衣服や記章を社会的マイノリティーに与えることがあったことも知られています³⁰。この色に変身したルナ

²⁹ E. Suomela-Härmä, op. cit., p. 413-414 ; M. Pastoureau, *Jésus chez le teinturier. Couleurs et teintures dans l'Occident médiéval*, Paris : Léopard d'or, 1997, p. 26-32.

³⁰ M. パストゥローや、他の研究者が様々な論考で指摘するところであるが、特に次の論考が重要である。M. Pastoureau, « Forme et couleur du désordre : le jaune avec le

ルが旅芸人であると称したことが偶然だとはまず考えられません。中世において旅芸人は社会的に貶められた職業とされていました。『狐物語』の全体において黄色 Jaune の出現例は 6 つだけなのですが、だからといって、このエピソードはこの後に成立した枝篇に影響を与えていないのか、といえはそういうことではなく、第 Ib 枝篇からやや下の時期に成立したと推定されている第 VI 枝篇（1190 年頃）の作者は、ルナールとイザングランの決闘裁判を描くにあたって、ルナールに黄色の盾を持たせています。

Escu roont a sa manere

A conmande que l'en li quere :

Un l'en ont quis qui fu tot gaunes. (VI 877-879)

〔ルナールは〕彼にぴったりの丸い盾を探すようにと〔味方に〕命じました。まっ黄色の盾を探してきてもらいました。〕

黄色 Jaune の使用例は少ないのですが、第 Ib 枝篇と第 VI 枝篇が『狐物語』の創作が最も活発だった時代に制作されたと推測されていること、 α 、 β 、 γ の三系列全ての写本に収められていることから言っても、ルナールのセカンドカラーとしての黄色はある程度中世の人々に受け入れられていたと考えるのが妥当であるように思えます。それに対して、次に紹介する第 XIII 枝篇でのルナールの黒色への変身が人々に広く受け入れられたか否かには疑問を持っています。

この枝篇でのルナールは、イザングランと出会った際に正体を隠すために葉草でもって黒色に変身しショフレと名乗ります。彼は、イザングランを畏にはめて足を失わせ、エルサンと再び姦通を犯し、犬のローネルを人間が仕掛けた畏にかけて宙吊りにした後、栗鼠のルーセルと共に修道院の鶏小屋に侵入した

vert », in id., *Figure et couleurs. Etudes sur la symbolique et la sensibilité médiévales*, Paris : Le léopard d'or, 1986, p. 23-34.

ところを修道士たちによって捕まります。黒い色をしているが故に修道士たちから悪魔と思われて悪魔祓いの儀式をされますが、彼らから逃れると今度はルーセルを食べようとする、といった具合に悪事を繰り返した挙句、ルーセルにノーブル王の宮廷で訴えられ、最後はローネルとの決闘裁判に敗れて簀巻きにされて川に投げ込まれたところを従兄弟のグランベールに助けられるというところで物語が終わります。

この枝篇では黒という色彩に似つかわしく、変身後のルナルが繰り返し悪魔と結びつけられて語られます。

E quant Roonel l'a veü,
 Ne l'a mie reconneü
 Por la grant neirte qu'il avoit,
 Ains quide que deables soit. (XIII 1147-1150)

（ローネルはルナルを見ましたが、とても黒いので、まったく誰だか分かりません。むしろ悪魔ではないかと思います。）

« Sire, l'en l'apele Chufe.
 Issi me dit qu'il a a non,
 S'a vestu un noir pelicon. »
 « Noir diable » dit li lions,
 « Il n'est pas de nos regions. » (XIII 1326-1330)

（「殿よ、彼の名前はショフレです。私に対してそのように名乗りました。黒い毛皮を身に着けています。」「黒い悪魔だな、」とライオンは言います。「土地の者ではない。」

Ce n'est pas gorpil, einz diable,

Seignors, nel tenes mie a fable. (XIII 1443-1444)

(あれは狐じゃなくて悪魔だ。皆さん、冗談だと思っはけません。)

A la fontaine vit Renart

Qui estoit plus noir que maufez. (XIII 1664-1665)

([ティベールは] 泉のところで悪魔よりも黒いルナールを見ました。)

最初の例は、ルナールを見た犬のローネルの反応で、次は、ローネルがノーブル王の宮廷にルナールを訴える場面です。続いては鶏小屋で狐を発見した修道士の台詞、最後はノーブル王の使者としてルナールを迎えに来たティベールが黒い狐を見るという場面です。

上にも触れましたように、今回作成したデータによると、黒 Noir 全 30 例中、19 例が『狐物語』の中では後期に作成されたと考えられる第 XIII 枝篇と第 XXIII 枝篇の中で使われています。第 XXIII 枝篇は「魔術師ルナール」と呼ばれる悪魔性の強い作品で、ここでの黒は生贄の猫や魔術の際呼び出した動物に姿を変えた悪魔に用いられています。前期の作品とは雰囲気が変わっていて、物語が発展の末に変質していく様子が伺えます。文献学的に言っても第 XIII 枝篇は『狐物語』の主要三系列の写本のうち β 、 γ 系の完全写本には収められておらず、第 XXIII 枝篇を収めるのは γ 系の M 写本以外にありません。以上の理由から、黒=悪魔という観念連合がルナールを語る際に用いられるようになったのは『狐物語』が多くの作者によって語られながら発展、変質した結果のことであると評価します。とはいえ、その一方で、もともとは赤褐色のルナールの毛色の変容することで作品に新しい色が加わっていくという、この物語における色彩のありかたをよく知らしてくれる現象と言えるでしょう。

結語

以上に、作成したデータをもとに、ルナールの毛皮の色、あるいはルナールが傷つける動物の毛皮が『狐物語』における色彩の源になっている、という見方からこの物語を論じてみました。狐は、赤褐色を基調に喉は白という毛並みをしています。当時の人々にとって、赤褐色ほどにルナールの悪徳をよく言い表す色はありません。白は、その高貴な輝きによって人間たちを魅了しますが、ルナールはそのことを利用して彼らを騙します。また、この色がルナールの智慧に満ちた言説によって白髪と結び付けられる時には、彼の姦通の隠れ蓑ともなりました。彼に傷つけられて血で赤く染まった動物は、身分の高い「法皇や皇帝気取りででもいるのか」、と場違いな冗談で罵られます。ルナールはまた、時に黄色に姿を変えて周辺の性格を際立たせ、物語の発展の末、彼の悪魔性が強調されるようになると黒く姿を変えます。量的に言って、物語全体の色彩語全 180 語のうち 62 語がルナールの毛皮の色を修飾しています。ルナールの毛皮の色が前面に押し出されているのがこの物語における色彩のあり方です。

以上のまとめにあらわれた、「赤褐色や黄は裏切りの色」、「白は高貴な色」、「黒の悪魔性」といった概念は、『狐物語』が書かれた時代の象徴体系に関する今日の研究者の考えを裏切っていないように思われます。本来、遠い時代における文化現象を研究する目的は対象が通念に一致することを確認することではなく、その通念を打ち破ることでしょう。その意味では不満が残るわけですが、まだまだ始めたばかりの研究ですので、今後の課題にしたいと思います。ご清聴ありがとうございました³¹。

³¹ 会場で頂いた意見をうけて、テキストの伝承の過程で使われている色彩語が変化している例はないか、とマルタン版のヴァリエントをあたってみました。しかし、第 VI 枝篇第 869 行でイザングランが決闘裁判で使う盾が α 系 β 系では真紅であるのに対して、これらをもとに時代が下がってから編纂されたと考えられている γ 系の C、M 写本、また H 写本では白になっている、という例の他には特に目につくものは見つからなかった。

データ

各例の一行目には枝篇番号と行番号，加えて色彩語を含むテキスト，二行目にはそのテキストの内容に関する覚書を記した。三行目には，問題となっている色彩語，色彩語が何を修飾しているのか，それは誰の持ち物かということを，縦線で区切って記している。

テキスト中の色彩語にはアンダーラインを施した。また，色彩語を示すにあたって，動詞と名詞は形容詞の形に変換した。

三行目の真ん中の項目である色彩語が修飾する対象は，表Bに示したように「毛色・頭髪・髭」，「表情・心情」，「衣服」，「武器・馬具」，「衣服／血」，「血」，「その他」に分類できた。この項目が「その他」の場合は，これが何であるのかを一番右の項目に示している。

第I枝篇（1620行中用例11）

[I 134] Hersent <u>rogist</u> , si ot vergoigne, (裁判の場面で，姦通があったのであればエルサンも罰を受けねばならない，というグランベールの台詞を受けて) Roge 表情・心情 エルサン
[I 662] Tyegiers li forniers de la vile / Qui esposa <u>noire</u> Cornille, (ブランに襲いかかる村人たちの列挙) Noir 毛色・頭髪・髭 村人の女房
[I 699] De quel ordre voles vos estre / Que <u>roge</u> caperon portes ? » (血まみれのブランに対するルナールのからかい) Roge 衣服／血 ブラン (熊)
[I 731] Dites moi le <u>rox</u> deputerre / Qu'il me viegne a ma cort dreit fere (ティベールに使者としてルナールを召喚せよと命じるノーブル王の台詞) Ros 毛色・頭髪・髭 ルナール

<p>[I 903] Bien douüsse estre chastiez / Qui tantes fois sui conchiez / Par le barat Renart le <u>rox</u> ! (司祭の家に閉じ込められてルナールを呪うティベール)</p> <p>Ros 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[I 1007] Quant Renart entent la novele. / Le cuer li bat soz la mamele, / Tot le viaire li <u>neirci</u>. (グランベールから宮廷での事情を聞いて青ざめるルナール)</p> <p>Noir 表情・心情 ルナール</p>
<p>[I 1059] De l'ombre de la <u>blance</u> image / Quida de voir, ce fust furmage. (グランベールに罪—イザングランを陥れたこと—を告解するルナールの台詞)</p> <p>Blanc その他 月</p>
<p>[I 1208] Et Bruns qui la teste ot <u>vermeille</u>. (ルナールが出廷した場面の描写)</p> <p>Vermeil 衣服／血 ブラン（熊）</p>
<p>[I 1266] Mes foi que doi deu et saint Jorge / G'ai tote <u>chenue</u> la gorge. (裁判の場で、自分は老いているので悪事など働けないと弁明するルナール)</p> <p>Chenu 毛皮・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[I 1291] Molt savez de la <u>fauve</u> anness, / Se ja n'avez vostre promesse / Que l'en vos a toz jors promise. (裁判の場で、ノーブル王がルナールを叱責)</p> <p>Fauve 毛色・頭髮・髭 雌ろば（fauve asnesse は「偽善」を意味する）</p>
<p>[I 1611] Totes li levent de <u>blanc</u> vin. (モーパルチュイに逃げ帰り、傷の手当てを受けるルナール)</p> <p>Blanc その他 ワイン</p>

第 Ia 枝篇 (584 行中用例 2)

[Ia 1797] De Renart le rox s'esbahirent / Qant avec la dame le virent,

(王妃の強姦の場面での王の軍隊の反応)

Ros | 毛色・頭髮・髭 | ルナール

[Ia 1980] Et a mon petit filz Rovel / Lairai l'essart Tibaut Forel / Et le cortil
detrers la grance / Ou a meinte jeline blance.

(死刑に処せられることになり、遺産分けを指示するルナールの台詞)

Blanc | 毛色・頭髮・髭 | 鷄

第 Ib 枝篇 (1008 行中用例 5)

[Ib 2241] Faite l'avoit por teindre en jaune.

(染物屋が布を黄色く染めようとしている)

Jaune | その他 | 布

[Ib 2314] Ta teinture est molt bien pernanz, / Jaunez en sui et reluisanz.

(染物桶に落ちたルナールの染物屋に対する台詞)

Jaune | 毛色・頭髮・髭 | ルナール

[Ib 2400] Un ros garcon de pute part, / Un losenger, un traïtor

(変装しているルナールに対して、ルナールのことを語るイザングラン)

Ros | 毛色・頭髮・髭 | ルナール

[Ib 2855] Moi saver bon chancon d'Ogier, / Et d'Olivant et de Rollier / Et de
Charlon le char chanu. »

(旅芸人ガロパンに扮するルナールのレパートリー)

Chenu | 毛色・頭髮・髭 | シャルルマーニュ

[Ib 3061] Dame Hermeline li raconte / Q'avenue li est grant honte / De Poncet a la
crine bloie

(死んだ恋人ボンセについて語るエルムリーヌ)

Bloi | 毛色・頭髮・髭 | ボンセ (穴熊)

第 II 枝篇（1396 行中用例 17）

<p>[II 140] Et tenoit un <u>ros</u> pelicon / Dont les goles estoient d'os. (夢の中で怪物に襲われるシャントクレール)</p> <p>Ros 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[II 153] Mes de ce s'est plus merveilliez / Que <u>blans</u> estoit desos le ventre (夢の中で怪物に襲われるシャントクレール)</p> <p>Blanc 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[II 190] Que j'ai songie un songe estrange. / Deles cel trou les cele granche, / Et une avision molt male, / Por quoi vos me vees si <u>pale</u>. (妻のパンツに悪夢の内容を話すシャントクレールの台詞)</p> <p>Pale 表情・心情 シャントクレール (鶏)</p>
<p>[II 196] Avis me fu el somellier / Que ne sai quel beste venoit / Qui un <u>ros</u> pelicon vestoit, (パンツに悪夢の内容を話すシャントクレールの台詞)</p> <p>Ros 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[II 200] D'os estoit fete l'orleüre, / Tote <u>blance</u>, mes molt ert dure : (パンツに悪夢の内容を話すシャントクレールの台詞)</p> <p>Blanc その他 衣服の縁</p>
<p>[II 225] Icele chose que veïstes / El someller que vos feïstes, / Qui le <u>ros</u> pelicon vestoit (シャントクレールの夢を解釈するパンツの台詞)</p> <p>Ros 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[II 229] Bien le poes apercevoir / Au pelicon qui <u>ros</u> estoit (シャントクレールの夢を解釈するパンツの台詞)</p> <p>Ros 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[II 349] Par de desoz un <u>roge</u> chol / Le prent Renars parmi le col, (ルナールがシャントクレールを捕える場面)</p> <p>Roge その他 キャベツ</p>

<p>[II 414] [« Bardol, Travers, Humbaut, Rebors, / Cores apres Renart le <u>ros</u> ! »] (ルナールに犬をけしかける百姓コスタンの台詞)</p> <p>Ros 毛色・頭髪・髭 ルナール</p>
<p>[II 673] Si choisi Renart qui l'esgarde. / Il le conut bien au poil <u>ros</u>. (ルナールの姿を見つけるティベール)</p> <p>Ros 毛色・頭髪・髭 ルナール</p>
<p>[II 691] Et Tieberz fu pleins de sojour, / S'ot les gernons vels et <u>cenuz</u> (ティベールの様子の描写)</p> <p>Chenu 毛色・頭髪・髭 ティベール (猫)</p>
<p>[II 889] En aventure de lui prendre / Me mis por ce que gel vi tendre, / <u>Jaunet</u> et de bone savor. (農家からチーズを奪って見張り番の老婆をからかう烏のチェスランの台詞)</p> <p>Jaune その他 チーズ</p>
<p>[II 905] Mangie en a maugre la dame / Et del plus <u>jaune</u> et del plus tendre, (奪ったチーズを食べるチェスランの描写)</p> <p>Jaune その他 チーズ</p>
<p>[II 999] Ja ne cuide que feïst esme / Cil fel, cist <u>ros</u> et cist contres, (ルナールに襲われて罵るチェスラン)</p> <p>Ros 毛色・頭髪・髭 ルナール</p>
<p>[II 1057] Et Hersent qui se reconforte, / Le connut bien a la pel <u>rousse</u>. / Ne puet muer que ne s'escousee. (ルナールの姿に気付くエルサン)</p> <p>Ros 毛色・頭髪・髭 ルナール</p>
<p>[II 1144] « Quoi, diables ? nous noierons / Renart le <u>rous</u> que tant heons (ルナールに乱暴された小狼たちの台詞)</p> <p>Ros 毛色・頭髪・髭 ルナール</p>

[II 1182] Moult est tes corages muanz, / Quant Renars, cilz rous, cilz puanz, / Cilz vilz lechieres, cilz garcons / Vous monta onques es arcons.

（エルサンを責めるイザングランの台詞）

Ros | 毛色・頭髮・髭 | ルナール

第 III 枝篇（510 行中用例 4）

[III 72] Vez con la gorge est blanche et nete ! »

（道に死んだふりをして横たわるルナールを見た商人の台詞）

Blanc | 毛色・頭髮・髭 | ルナール

[III 435] De noif furent les voies blanches.

（尻尾での魚釣りのエピソードでの情景描写）

Blanc | その他 | 道

第 IV 枝篇（478 行中用例 4）

[IV 66] Si a choisi en un plessie / Par encoste d'unes avoines / Une abeie de blans moines

（修道士の僧服が白いシトー会修道院の様子）

Blanc | 衣服 | 修道士

[IV 70] Li mur furent de roce bise / Molt fort, ne vos en mentiron,

（修道院の農園の様子）

Bis | その他 | 岩

[IV 202] Le puis trouva enmi sa voie / Ou Renars le rous s'esbanoie.

（イザングランは井戸の中を覗きこむ）

Ros | 毛色・頭髮・髭 | ルナール

[IV 215] Et dist « moult par sui maubailiz, / De ma fame vilz et honniz / Que
Renars li rous m'a fortraite

(井戸の水面に映る自分の姿を妻と勘違いしたイザングランの台詞)

Ros | 毛色・頭髪・髭 | ルナール

第 V 枝篇 (246 行中用例なし)

第 Va 枝篇 (1026 行中用例 3)

[Va 293] Or cuit, Ysengrins tendra cort / Renart le ros, se tant puet fere / Qu'a
la cort le puisse atrere :

(ルナールを裁判に訴えようとイザングランは決心する)

Ros | 毛色・頭髪・髭 | ルナール

[Va 749] Renars li ros m'a si bailli / Por la jeline q'asailli.

(ブランが裁判の場でルナールの過去の悪事を告発する)

Ros | 毛色・頭髪・髭 | ルナール

[Va 948] A cest mot se sont tuit teü / Et li plus joune et li chenu.

(裁判の場面に居合わせた動物たちの描写)

Chenu | 毛色・頭髪・髭 | 「老いも若きも」

第 VI 枝篇 (1542 行中用例 13)

[VI 20] Tuit i sont fors Renart le ros, / Dont meinte chamor est meüe.

(ノール王の宮廷の様子。ルナールだけが参内しない)

Ros | 毛色・頭髪・髭 | ルナール

[VI 75] « Ces saluz ne vos ren je mie, / Rous ennuios de pute foi : / Einz remandroiz
anuit o moi.

(ノール王のルナールに対する台詞)

Ros | 毛色・頭髪・髭 | ルナール

<p>[VI 79] Einz que issiez de cest ostage, / Nus lairois vos ce quit bon gaje, / Au mains cele <u>rose</u> pelice.</p> <p>（ノーブル王のルナールに対する台詞）</p> <p>Ros 毛色・頭髪・髭 ルナール</p>
<p>[VI 161] Renars qui scet de <u>fauve</u> anesse / Et de mainte fausse promesse, / Respondi que bien le feroit</p> <p>（ノーブル王による訴えの陳述。ルナールが使者ティベールを罠にはめた件について）</p> <p>Fauve 毛色・頭髪・髭 雌ろば（fauve asnesse は「偽善」を意味する）</p>
<p>[VI 295] « Baus sire Bruns, e car me dites, / Se iestes moines ou ermites / Et se messe chanter savez, / Quant vos si grant corone avez. / Molt par aves <u>vermeil</u> le chef. »</p> <p>（ノーブル王による訴えの陳述。ルナールが使者ブランを罠にはめた件について）</p> <p>Vermeil 衣服／血 ブラン（熊）</p>
<p>[VI 391] Renars li <u>ros</u> (que malfu l'arde !) / Li dist que des vignes fust garde.</p> <p>（ノーブル王による訴えの陳述。ローネルを罠にはめた件について）</p> <p>Ros 毛色・頭髪・髭 ルナール</p>
<p>[VI 525] Et de jeunes et de <u>canus</u> / En as asez por fol tenus.</p> <p>（イザングランの陳述。ルナールの悪事について本人に向けて）</p> <p>Chenu 毛色・頭髪・髭 「老いも若きも」</p>
<p>[VI 637] Quant enmi le puis m'encontras / Donc fu mes cuers iries et <u>teins</u>. / Molt es de felonie pleins.</p> <p>（イザングランの陳述。井戸のエピソードについて）</p> <p>Teint 表情・心情 イザングラン</p>
<p>[VI 651] Li <u>blanc</u> moine me traitrent fors,</p> <p>（イザングランの陳述。井戸のエピソードについて）</p> <p>Blanc 衣服 修道士</p>

<p>[VI 869, 870] Son escu est <u>vermeuls</u> trestoz, / Et la cote <u>roge</u> desoz :</p> <p>(ルナールとイザングランの決闘裁判)</p> <p>Vermeil 武具・馬具 イザングランの盾</p> <p>Roge 武具・馬具 イザングランの鎖帷子</p>
<p>[VI 879] Un l'en ont quis qui fu tot <u>gaunes</u>.</p> <p>(ルナールとイザングランの決闘裁判)</p> <p>Jaune 武具・馬具 ルナールの盾</p>
<p>[VI 1496] Uns freres qui bien l'aperçoit / Que Renars li <u>ros</u> les decoit.</p> <p>(僧院に入ったルナールのエピソード)</p> <p>Ros 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>

第 VII 枝篇 (844 行中用例 12)

<p>[VII 161, 165] Por ce qu'il vestent capes <u>noires</u>, / Si les apele l'en provoires : / Mes il sont tuit con forsenez. / Meuls les puis apeler maufez : / Maufe sont <u>noir</u> et cist ausi.</p> <p>(ルナールの台詞。僧服の黒いクリュニー会の修道士について)</p> <p>Noir 衣服 修道士</p> <p>Noir 衣服 修道士</p>
<p>[VII 305] Qant il vit l'eve <u>blanchoier</u> / Et le mulon dedenz plungier, / Si se commence a dementer</p> <p>(干し草の山の上で寝ていたところ、洪水に流されそうになるルナール)</p> <p>Blanc その他 水面</p>
<p>[VII 355] Volentiers preisse la haire / Et devenisse moignes <u>blans</u> ; / Mes j'ai un mal parmi les flans</p> <p>(修道僧に関するルナールの考察)</p> <p>Blanc 衣服 修道士</p>

<p>[VII 359] Et je sai bien que moignes <u>noir</u> / Trestos sont faillis et por voir / N'ont cure d'ome s'il n'est seins / Ou s'il n'est clers ou chapeleins.</p> <p>（修道僧に関するルナールの考察）</p> <p>Noir 衣服 修道士</p>
<p>[VII 377] Moigne <u>noir</u> sont trop a mal ese, / Ja n'auront cose qui lor plese,</p> <p>（修道僧に関するルナールの考察）</p> <p>Noir 衣服 修道士</p>
<p>[VII 409] Li <u>blans</u> ordres par est si fors, / Nus n'i entre qui n'i soit mors / De je üner et de veiller,</p> <p>（修道院に関するルナールの考察）</p> <p>Blanc 衣服 修道士</p>
<p>[VII 471] « Fel nein, fel <u>rous</u>, fel descreeüz, / Tant par es ores descoüs / Que Hersent as t'amor donee,</p> <p>（ユベール（鳶）のルナールへの叱責）</p> <p>Ros 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[VII 689] Hunant li <u>roux</u> ne Tabarie / Qui tuit vivent de roberie,</p> <p>（ルナールの告解。自分と悪人の比較）</p> <p>Ros 毛色・頭髮・髭 悪漢</p>
<p>[VII 691, 692] Ne Qoquins ne Hernauz li <u>roux</u> / Qui vet contant des <u>rogés</u> trouz,</p> <p>（ルナールの告解。自分と悪人の比較）</p> <p>Ros 毛色・頭髮・髭 悪漢</p> <p>Rogé その他 穴</p>
<p>[VII 701] Ne Pieres li <u>roux</u> ne Fetas / Qui sevent remuer lor dras :</p> <p>（ルナールの告解。自分と悪人の比較）</p> <p>Ros 毛色・頭髮・髭 悪漢</p>

第 VIII 枝篇 (468 行中用例 2)

[VIII 31] Onc n'i oi savor de cuisine / Ne vert sause ne ail ne poivre / Ne cervoise
ne vin por boire.

(ルナールの悔恨。「鳥たちを料理もすることなく捕食していた」)

Vert | その他 | ソース

[VIII 66] Ja n'a il jone ne chenu / En ceste terre qui ne sache, / C'onques ne fui en
cele place / Ou je pousse nul mal fere / C'onques m'en voussisse retrere.

(ルナールの改恨。「万人が自分の悪事を知っている」)

Chenu | 毛色・頭髮・髭 | 「老いも若きも」

第 IX 枝篇 (2212 行中用例 8)

[IX 505] Jel fis entrer en une selle / El puis ou avoit seals deus, / (Ce fu bone gile
et bon jeus) / En une abaie a blanc moines.

(過去に犯した悪事を語るルナール。井戸のエピソード)

Blanc | 衣服 | 修道士

[IX 636] « Dont en entreraï je en peine / Et tost en serai en la voie, / Se ton blanc
coc Blancart avoie / Que je vi er en ton plaissier. »

(村人リエタルへの助言の見返りとして鶏を要求するルナールの台詞)

Blanc | 毛色・頭髮・髭 | 鶏

[IX 698] Fier et refier, done et redone / Tant qu'il ait vermeile corone,

(ルナールのリエタルへの助言。ブランを殺すように勧める)

Vermeil | 衣服/血 | ブラン (熊)

[IX 965] Et je le soi bien enlacher / De blanches paroles et pestre :

(リエタルが妻にことの経緯を語る。ブランに猶予をもらったことについて)

Blanc | その他 | 言葉

<p>[IX 1170] Il li depeceront la pel / Et li ferunt <u>roge</u> capel. (リエタルへの妻の助言。「犬にルナールを襲わせなさい」)</p> <p>Roge 衣服／血 ルナール</p>
<p>[IX 1370] Et l'aert as dens par l'oreille / Qui en pou d'ore fu <u>vermeille</u>. (ルナールは犬たちに襲われる)</p> <p>Vermeil 血 ルナール</p>
<p>[IX 2196] Ne pot au vilein remanoir / Oe, capon, coc <u>blanc</u> ne <u>noir</u>, (ルナールはリエタルの家畜を欲しいままに食らう)</p> <p>Blanc 毛色・頭髪・髭 鶏 Noir 毛色・頭髪・髭 鶏</p>

第 X 枝篇（1704 行中用例 6）

<p>[X 27] Onc n'i out celui qui n'oüst / Robe au meins de <u>vair</u> o de <u>gris</u>. (ノーブル王の宮廷の様子)</p> <p>Vair 衣服 諸侯 Gris 衣服 諸侯</p>
<p>[X 464] Entalentes est molt del prendre / Por ce qu'il le vit <u>gaune</u> et tendre : (ルナールの畏にかかる犬のローネル。畏にはチーズが仕掛けられている)</p> <p>Jaune その他 チーズ</p>
<p>[X 804] Bien l'a moquie Renars li <u>rox</u> / Qui le fait venir de travers. (傷つき帰ってきたローネルをからかう諸侯の台詞)</p> <p>Ros 毛色・頭髪・髭 ルナール</p>
<p>[X, 1368] Li rois out le vis <u>teint</u> et <u>pale</u>. (ルナールが宮廷に現れた際のノーブル王の様子)</p> <p>Teint 表情・心情 ノーブル王 Pale 表情・心情 ノーブル王</p>

第 XI 枝篇 (3402 行中用例 22)

<p>[XI 6] Mais molt out son cuer triste et <u>noir</u> / Por sa viande qui li lasche. (冒頭の場面。食糧の不足)</p> <p>Noir 表情・心情 ルナール</p>
<p>[XI 116] Quant l'apercut Renars li <u>ros</u>, / Si en out en son cuer grant joie. (イザングランを木にしぼりつけたルナール。村人が彼を殴るのを見て楽しむ)</p> <p>Ros 毛色・頭髪・髭 ルナール</p>
<p>[XI 383] Renart qui tos sout les baraz / Plus que beste <u>noire</u> ne <u>blanche</u>, (犬のローネルを毘にかけるルナール)</p> <p>Noir 毛色・頭髪・髭 獣たち</p> <p>Blanc 毛色・頭髪・髭 獣たち</p>
<p>[XI 466] « Sire, » fait il, « foi que doi vos, / Tot ce m'a fait Renart li <u>ros</u>. (ノーブル王にルナールから受けた災難を報告するローネル)</p> <p>Ros 毛色・頭髪・髭 ルナール</p>
<p>[XI 470] Tot le viaire li est <u>teint</u> / De la peine qu'il ot soferte. (ローネルの様子描写)</p> <p>Teint 表情・心情 ローネル (犬)</p>
<p>[XI 518, 521] Brichemer et Brun l'ors enporte / Roonel amont en la sale, / Qui out le vis et <u>teint</u> et <u>pale</u> / Por les cous qu'il out recoüs : / Et por ce que il fu pendus / Estoit <u>pale</u> e descolores. (ノーブル王一行が傷ついたローネルを宮廷に運ぶ)</p> <p>Teint 表情・心情 ローネル (犬)</p> <p>Pale 表情・心情 ローネル (犬)</p> <p>Pale 表情・心情 ローネル (犬)</p>

<p>[XI 626] Tot out le vis et <u>pale</u> et <u>pers</u> / Si con il out este blecie, / Tot le cuir avoit detrencie.</p> <p>（鳶との戦いで傷ついたルナールを通りがかった騎士が見つける）</p> <p>Pale 表情・心情 ルナール</p> <p>Pers 表情・心情 ルナール</p>
<p>[XI 1052] Dist Droins « foi que je doi vos, / Ce est Renars li maves <u>ros</u> / Qui toz mes enfans a mangiez,</p> <p>（鳶のドロアンが、犬のモランにルナールを襲うように依頼）</p> <p>Ros 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[XI 1444] « Voire » dist Renart, « deu merci, / Malement m'a mon cuer <u>noirci</u> / Et desache et detire.</p> <p>（モランに襲われて傷ついたルナールが、イザングランにその様子を報告）</p> <p>Noir 表情・心情 ルナール</p>
<p>[XI 1632] Et Renars si cort a l'escu, / Del tabor le fiert lez l'oreille / Que la teste li fait <u>vermeille</u>.</p> <p>（ルナールが蝸牛のタルディフに襲いかかる）</p> <p>Vermeil 血 タルディフ（蝸牛）</p>
<p>[XI 1639] L'espie en porte tot <u>vermeil</u> / Qui reluist contre le soleil.</p> <p>（ルナールはタルディフを倒して、その武具を持ち去る）</p> <p>Vermeil 血 タルディフの血で染まった槍</p>
<p>[XI 1821] Vois tante enseigne, tante lance, / Tant <u>blanc</u> haubert et tant escu !</p> <p>（ノーブル王が、異教徒との戦いに際して編成した軍をルナールに見せて言う台詞）</p> <p>Blanc 武具・馬具 ノーブル王軍の武具</p>
<p>[XI 1948] Le penon et l'ensegne <u>blance</u> / Qui est tote pure de siee / Portera en l'ost Percehaie.</p> <p>（ルナールの息子のペルスエを軍の旗持ちにさせるというノーブル王の台詞）</p> <p>Blanc 武具・馬具 ノーブル王軍の軍旗</p>

<p>[XI 2515] Li rois l'oï, si en sosrit, / D'ïre et de mautalant <u>nercie</u>, (ルナールの裏切りを知ったノーブル王の反応) Noir 表情・心情 ノーブル王</p>
<p>[XI 2605] A la rescusse de Brun l'ors / Venoit poignant plus que le cors / Desor un grant destrer <u>baucenc</u>. (ルナール軍とノーブル軍の戦い。ベルスエの戦いぶり) Baucenc 毛色・頭髪・髭 馬</p>
<p>[XI 3229] Estes vos Noble le lion / Arme sor son cheval <u>ferrant</u>, / La lance en son poing paumoiant. (ルナール軍とノーブル軍の戦い) Ferrant 毛色・頭髪・髭 馬</p>
<p>[XI 3261] Si se desarment la amont / En la tor qui est bele e <u>blance</u>. (戦闘の後, ルナールたちは宮殿に戻る) Blanc その他 塔</p>
<p>[XI 3333] « Ha punes <u>rox</u> de male part, / De ma gent m'as fet grant essart. (ルナールを捕えたノーブル王の台詞) Ros 毛色・頭髪・髭 ルナール</p>

第 XII 枝篇 (1486 行中用例 2)

<p>[XII 206] N'il n'en prendront ja reencon, / S'il n'ont vostre gris pelicon. » (犬が現れたのを見て, ティベールを置いて逃げるルナールの台詞) Gris 毛色・頭髪・髭 ティベール (猫)</p>
<p>[XII 955] Meis dones moi cel <u>blanc</u>, cel mol. » (ティベールに教会の中で見つけたチーズを要求するルナールの台詞) Blanc その他 チーズ</p>

第 XIII 枝篇（2366 行中用例 22）

[XIII 49] Et li venerres vait devant / sor un grant chasceor liart.

（城主の狩猟係が乗る馬の毛色について）

Liart | 毛色・頭髮・髭 | 馬

[XIII 574] Li chevalier entre en la sale, / De laste est devenu pale.

（狩猟から帰った城主の様子描写）

Pale | 表情・心情 | 騎士

[XIII 777] Chevous out noirs comme arrement.

（城主お抱えの小人の描写）

Noir | 毛色・頭髮・髭 | 小人

[XIII 1020, 1022] Renart en a molt tost frotee / Tote sa chere et noirciee / Et tot son cors delivrement : / Lors fu plus noir que arement.

（自らを黒く染めるルナル）

Noir | 毛色・頭髮・髭 | ルナル

Noir | 毛色・頭髮・髭 | ルナル

[XIII 1149] E quant Roonel l'a veü, / Ne l'a mie reconneü / Por la grant neirte qu'il avoit, / Ains quide que deables soit.

（黒く変身したルナルを見たローネルの反応）

Noir | 毛色・頭髮・髭 | ルナル

[XIII 1163] « Dont estes vos, por seint Martin, / Qui si aves noir pelicon ? »

（黒く変身したルナルに対するローネルの台詞）

Noir | 毛色・頭髮・髭 | ルナル

[XIII 1328, 1329] « Sire, l'en l'apele Chufe. / Issi me dit qu'il a a non, / S'a vestu un noir pelicon. » / « Noir diable » dit li lions, / « Il n'est pas de nos regions. »

（変身したルナルに受けた被害をノーブル王に訴えるローネルの台詞）

Noir | 毛色・頭髮・髭 | ルナル

Noir | 毛色・頭髮・髭 | ルナル

<p>[XIII 1355] Devant lui est Rossel venu / L'escurel au pilicon <u>rox</u>, (ルーセル登場) Ros 毛色・頭髮・髭 ルーセル (栗鼠)</p>
<p>[XIII 1433] Il entra ens, garde, si voit / Renart qui fu plus <u>noir</u> que mure : (村人が鶏小屋に侵入したルナールを見つける) Noir 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[XIII 1597] Dont j'ai le cuer dolant et <u>noir</u>. (ルーセルはノーブル王にルナールのことを訴える) Noir 表情・心情 ルーセル (栗鼠)</p>
<p>[XIII 1598] Vestu a un pelicon <u>noir</u>, / Mes il est felon e puant. » (ルーセルはノーブル王にルナールのことを訴える) Noir 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[XIII 1665] A la fontaine vit Renart / Qui estoit plus <u>noir</u> que maufez. (ノーブル王の使者ティベールは、黒く変身したルナールを見つける) Noir 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[XIII 1710] Et mon seignor Renart le <u>noir</u> / Descent de son cheval premier, (ティベールを罾にかけるため、ルナールは森番の家の前で下馬する) Nos 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[XIII 2082] « Amis » dist il, « qui estes vos ? » / « Sire, je sui Renart le <u>ros</u>. (ルナールはグランペールに人質になるように頼む) Ros 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[XIII 2104, 2106] Un escu tot roon et <u>noir</u> / A aparellie, jel vos di, / Et un baston <u>noir</u> autresi. (ローネルとルナールの決闘裁判。ルナールの武具は黒い) Noir 武具・馬具 ルナールの盾 Noir 武具・馬具 ルナールの槍</p>

[XIII 2312] Quant je voudrai, je serai ros / Ausi con j'estoie devant. »
 (決闘裁判に敗れた後、救ってくれたグランベールに対するルナールの台詞)

Ros | 毛色・頭髮・髭 | ルナール

[XIII 2320] Car orendroit sans arester / Me verrez la nerthe oster. »
 (決闘裁判に敗れた後、救ってくれたグランベールに対するルナールの台詞)

Noir | 毛色・頭髮・髭 | ルナール

[XIII 2324] Lors comence ses horoisons, / Ses proieres e ses sarmons / Qu'il avoit
 en enfance apris. / Si fu toz ros, jel vos plevis,

(祈りによって染料を落とすルナール)

Ros | 毛色・頭髮・髭 | ルナール

[XIII 2364] Ci vos lais de Renart le noir.
 (物語の結語。「黒染めのルナールの話はこれでおしまい」)

Noir | 毛色・頭髮・髭 | ルナール

第 XIV 枝篇 (1088 行中用例 2)

[XIV 846] Char a vilein noire o blanche / Si n'est prous en nule seison.
 (村人の尻肉を噛み切った狼のプリモーが分け前をやると言うが、ルナールは断る)

Noir | その他 | 村人の肉

Blanc | その他 | 村人の肉

第 XV 枝篇 (522 行中用例 1)

[XV 370] Li un ot une hiue [=hive] bauchenne,
 (ティベールが出会った二人の僧のうちの一人が乗る馬の毛色について)

Baucenc | 毛色・頭髮・髭 | 馬

第 XVI 枝篇 (1506 行中用例 9)

[XVI 17] Ce fu en mai en cel termine / Que la fleur monte en l'aube espine, / Prez
reverdissent et li bos, / Et oissel chantent sanz repos / Et toute nuit et toute jour.

(プロローグ部分。新緑の季節のトボス)

Vert | その他 | 新緑の森

[XVI 51] Onques mes ne vi voir si bel : / Veez con est vert et floris !

(森の中の草地を見て感嘆するルナールの台詞)

Vert | その他 | 新緑の草地

[XVI 153] Tant vet a destre et a senestre / Renart li rous, li maleïs,

(村人の庭に侵入しようとする垣根の周りを探るルナール)

Ros | 毛色・頭髪・髭 | ルナール

[XVI 456] Aporte moi ton coc veret / Que j'ai hui toute jour gaitie,

(降参させて臣下にした村人ベルトーに対するルナールの要求)

Vair | 毛色・頭髪・髭 | 鶏

[XVI 627] « Ha puanz roux de pute estrace, / Alez vous en ! Ja dieu ne place »

(ルナールから逃げた鶏の台詞)

Ros | 毛色・頭髪・髭 | ルナール

[XVI 649] Tant entent au coc a parler / Renart li roux que mau feus arde, / Que
onques ne se dona garde :

(鶏とのやりとりに夢中で犬が現れたことに気がつかなかったルナール)

Ros | 毛色・頭髪・髭 | ルナール

[XVI 1234] Et cil garz roux de pute pel / Si n'a mes de viande cure, / Si aut ailleurs
querre pasture ! »

(獲物の山分け。イザングランの提案)

Ros | 毛色・頭髪・髭 | ルナール

[XVI 1298, 1301] « Sire » fet il, « par sainte Luce, / Cel vilain a la rouge aumuce. / Je n'en oi onques autre mestre. / Ne sai s'il est ou clerc ou prestre / Qui si porte rouge couronne, / Mes bien semble haute personne. / Qui soit ou pape ou cardinax. »

（ルナールの台詞。「イザングランが身をもって正しい山分けの方法を教えてくれた」）

Roge | 衣服／血 | イザングラン

Roge | 衣服／血 | イザングラン

第 XVII 枝篇（1688 行中用例 14）

[XVII 28] Dedenz avoit a granz foisons / Cos et gelines et chapons, / Qui sont d'une abaïe blanche.

（ルナールが忍び込んだ修道院の中庭の描写）

Blanc | 衣服 | 修道士

[XVII 38] Mes ainssi con il s'en issoit, / Uns des blans moines l'aparcoit :

（ルナールに気付く修道士）

Blanc | 衣服 | 修道士

[XVII 67] Par les jarrez li a boutee / Une verge d'un vert plancon.

（兎のクアールは彼を襲った皮職人を倒し、足に棒を通して担ぐ）

Vert | その他 | 枝

[XVII 164] Il n'i ot se hauz hommes non / Qui estoient (ce vous devis) / Vestuz ou de vair ou de gris.

（ノール王の宮廷の様子）

Vair | 衣服 | 諸侯

Gris | 衣服 | 諸侯

[XVII 264] Renart n'ot pas la coulour pale. / Dejuste le roi s'est assis, / Ne fist pas chiere de pensis.

（ノール王の宮廷におけるルナールの様子）

Pale | 表情・心情 | ルナール

<p>[XVII 580] Grinbert ot le vis <u>taint</u> et <u>pale</u> / Pour Renart que forment amoit. (ルナールの葬儀(本当は気を失っているだけ)に際してのグランベールの様子)</p> <p>Teint 表情・心情 グランベール (穴熊)</p> <p>Pale 表情・心情 グランベール (穴熊)</p>
<p>[XVII 730] Toute li <u>vermeillist</u> la face / Pour le cop qu'il ot receü. (ルナールの葬儀。「プランテ」という遊戯における孔雀と蝸牛のやりあい)</p> <p>Vermeil 血 タルディフ (蝸牛)</p>
<p>[XVII 836] Bernart qui <u>pale</u> ot la coulour / De jeüner et de mal treere, / Lors prist un sarmon a retrere / Un petit devant l'evangile. (ルナールの葬儀。首席司祭として説教をするベルナールの描写)</p> <p>Pale 表情・心情 ベルナール (ろば)</p>
<p>[XVII 954] Meinte <u>blanc</u> moine avez deceü / Et fet (dont moult lor doit grever) / Tart coucher et matin lever / Pour agaiter ton larrecin. (ベルナールによる葬送演説。ルナールの生前の行いについて)</p> <p>Blanc 衣服 修道士</p>
<p>[XVII 1061] Le cors ont iluec descendu / Qui couvert iert d'un paile <u>vert</u>. (埋葬に際して遺体を地面に置く場面)</p> <p>Vert その他 布地</p>
<p>[XVII 1320] « Il pert bien, la char avez vive » / Fet Chantecler qui le tint cort, / « Que li sans touz <u>vemaus</u> en cort. (ルナールとシャントクレールの決闘裁判。嘴でルナールに打撃を与えたシャントクレールの台詞)</p> <p>Vermeil 血 ルナール</p>
<p>[XVII 1340] De la poe parmi la hanche, / Qu'i li derompi la char <u>blanche</u>. (ルナールとシャントクレールの決闘裁判。ルナールの攻撃)</p> <p>Blanc その他 シャントクレール (鶏) の肉</p>

第 XVIII 枝篇（138 行中用例なし）

第 XIX 枝篇（90 行中用例なし）

第 XX 枝篇（94 行中用例なし）

第 XXI 枝篇（160 行中用例なし）

第 XXII 枝篇（722 行中用例 5）

[XXII 124] Et Ysengrin qu'ot poil chenu / S'en vint traiant a un mainil,
 (畑に現れたイザングラン)

Chenu | 毛色・頭髪・髭 | イザングラン

[XXII 297] Mar m'apelastes foi mentie, / Filz a putain, rous venimeus.
 (ルナールに対するイザングランの罵り)

Ros | 毛色・頭髪・髭 | ルナール

[XXII 410] Renart li rous en ot grant feste, / Qant il le vit agenoillier.
 (コンを作る話。コナン王が鹿のブリシュメールを殺した場面)

Ros | 毛色・頭髪・髭 | ルナール

[XXII 459] Mais or sachiez qui prenderoit / Une creste de coc vermeille,
 (コナン王へのルナールの台詞。「鶏のとさかが必要である」)

Vermeil | その他 | 鶏冠

[XXII 680] Si li saicha par les oreilles / Si que totes les fist vermailles :
 (コナン王はイザングランの毛皮をはぐ)

Vermeil | 血 | イザングラン

第 XXIII 枝篇 (2080 行中用例 14)

<p>[XXIII 5] Renart li <u>rous</u> s'est porpensez / Que tant estoit au roi mellez : (物語の冒頭。王と和解する方法を考えるルナール)</p> <p>Ros 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[XXIII 358] Si sui molt povres et menuz / Et si sui toz viex et <u>chanuz</u>. (ノーブル王の宮廷でのルナールの弁明。「ブランとの決闘は無理である」)</p> <p>Chenu 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[XXIII 782] De Brun, qui de Renart se plaint, / Molt le veïsmes <u>pale</u> et <u>taint</u> : (鹿のブリシュメールによる裁判の決着方法の提案)</p> <p>Pale 表情・心情 ブラン (熊)</p> <p>Teint 表情・心情 ブラン (熊)</p>
<p>[XXIII 969] Tant ai vescu, toz sui <u>chanuz</u>. / Or sui a male fin venuz. (死刑を宣告されたルナールがノーブル王に憐れみを乞う)</p> <p>Chenu 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[XXIII 1294] Adont fust sa seson venue / Et sa gorge <u>blanche</u> et <u>chanue</u>. (ルナールを救う魔術の師匠。「生け捕りにして冬まで生かしておけば喉元が白くなるだろうに」)</p> <p>Blanc 毛色・頭髮・髭 ルナール</p> <p>Chenu 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[XXIII 1359] Illeques doit sacrefier / D'un coc marchois ou d'un <u>noir</u> chat. (中が空洞の壺が弟子を育てる方法を師匠に教える)</p> <p>Noir 毛色・頭髮・髭 猫</p>
<p>[XXIII 1516] Por ce se tu es viex <u>chanuz</u>, / N'a il bachelier en ma terre / Qui mex i sache mon preu querre. (ノーブル王の結婚相手として「姫君」を連れてきたルナールを王が労う)</p> <p>Chenu 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>

<p>[XXIII 1554] Les piez avoit ja toz veluz : / Mes li chies estoit toz <u>chanuz</u> / Por les viex peuls qui i remestrent. (「姫君」に給仕するイザングランの描写) Chenu 毛色・頭髮・髭 イザングラン</p>
<p>[XXIII 1697] <u>Rouche</u> chapel a mes conperes : / Ce quit bien qu'il est empereres. » (頭の皮をはがされたイザングランに対するルナールのからかい) Roge 衣服／血 イザングラン</p>
<p>[XXIII 1803] Renart li <u>rous</u> qui en mal veille, / Quatre cerciaus lor apareille, (鹿のブリシュメールをいたぶるために輪ぬけの輪を用意するルナール) Ros 毛色・頭髮・髭 ルナール</p>
<p>[XXIII 1852] On li aporte frain et sele / Tote a <u>or</u> painte, molt fu bele. (猿のコワントローが犬のローネルに「乗馬する」ための準備) Or 武具・馬具 鞍</p>
<p>[XXIII 1984] Un petit siffle sor le feste : / Voit venir une <u>noire</u> beste. (ルナールは曲芸をする際に悪魔を呼び出す) Noir 毛色・頭髮・髭 獣 (悪魔)</p>

第 XXIV 枝篇 (314 行中用例 3)

<p>[XXIV 11] A une grant letre <u>vermoille</u> / Trovai une molt grant mervoille. (物語の冒頭。物語の典拠となった書物について) Vermeil その他 文字</p>
<p>[XXIV 79] Entre les autres en issi / Le gorpis, si asauvagi : / <u>Rous</u> ot le poil comme Renarz, / Moult par fu cointes et gaingnarz : (エヴァが棒で海面を叩くと飼いならせない動物が出てくる。その一つが狐だった) Ros 毛色・頭髮・髭 狐</p>

[XXIV 128] Se Ysengrin est mestre lerre, / Ausi est li rous forz roberre :

(イザングランとルナールの本性について)

Ros | 毛色・頭髪・髭 | ルナール

第 XXV 枝篇 (310 行中用例なし)

第 XXVI 枝篇 (132 行中用例 1)

[XXVI 49] Fromonz et Hermine la blanche / Ont andui d'une part la planche :

(腸詰を賭けて石けりをする動物たち)

Blanc | 毛色・頭髪・髭 | ブラン (オコジョ)